西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部

地域活動論叢

2021 年度

大学公式キャラクター
かなめ
要 ちゃん

とどけ！ぬくもり
要（かなめ）から

目　次

巻頭言　地域連携室室長　荒木　剛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
2021 年度の地域貢献活動と地域連携室の取り組み　学長　浅野　嘉延・・・・・・・・・・・・・２
「花園に、山姥？５」　地域連携室アドバイザー　石丸　美奈子・・・・・・・・・・・・・・・・３
西南女学院大学と西南女学院大学短期大学部の地域貢献活動の概要　・・・・・・・・・・・・１２

《子ども・子育て支援と学校教育》

１．一緒にあそぼう　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
２．いぼりの森の《みんな、だぁ～い好き!!》“みんな♪フレアイ隊”　・・・・・・・・・・１５
３．だいすきにっぽん　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
４．Let’s Think！のぞいてみよう、英語を使う仕事　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１

《観光と地域活性化》

５．SNS を活用したインバウンド集客研修　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４
６．北九州市「SDGs 未来モデル発信」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
７．小倉北区魅力向上事業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０
８．地域プロジェクト：Eco-SeTRA プロジェクト　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３
９．まち歩きイベントの企画と北九州市の情報発信　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７
１０．行橋市（および観光庁）
「海と山を一度に堪能できる体験観光コンテンツ」開発事業　・・・・・・・・・・４０

2021 年度地域連携室の取り組み

１．後期北九州市民カレッジ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４６
２．オンライン講演会「コロナ禍と女性」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５１
３．SDGs の取り組みを情報発信　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５５
４．フードドライブキャンペーン　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５５
５．広報活動（パネル展示、Facebook 開設他）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５６

新聞記事に見る　地域連携室 2021 年度の歩み　～地域連携室の足跡～　・・・・・・・・・・５７
創立１００周年、大学公式キャラクター要（かなめ）ちゃん　・・・・・・・・・・・・・・・５８

巻　頭　言

地域連携室室長　荒木　剛

本年度より地域連携室室長を拝命いたしました。地域連携室には、これまで室員として所属しておりましたが、これからは、室長の立場から地域連携室の運営と本学での地域貢献活動をサポートさせて頂くことになります。関係者の皆様方、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、2021 年度も新型コロナウィルス感染症の影響により、本学の地域貢献活動はさまざまな制約の中での取り組みとなりました。こうした中、ここに『地域活動論叢 2021 年度』を発刊し、皆様方にそれぞれの活動内容をご報告できましたことを大変嬉しく思います（少しの安堵もあります)。

思えば、2016 年 8 月に地域連携室が開設されてから、早くも 5 年半の月日が経ちました。この間、本学ではさまざまな地域貢献活動への取り組みが行われてきましたが、初代の室長で地域連携室の基礎を築かれた谷川弘治先生（2018 年度にご退職）は、それらが学生や教職員一人ひとりにとっての「物語づくり」につながると述べておられます(詳しくは『地域活動論叢 2018』をご覧ください)。つまり、地域貢献活動という経験によって、これまでの自分、これまでの日常の何かが変わる／変える、そのきっかけになると述べておられます。まさに、地域貢献活動の本質的な魅力は、谷川先生の言われた何かが変わる／変えることにあるのかもしれません(谷川先生は「強み」とも表現されています)。

先にも触れましたが、2021 年度も私たちはコロナ禍にあり、その出口はいまだ見えない状況にあります（ちなみに、この文章の執筆時はいわゆる第 6 波の真っ最中です)。おそらく、これから先も、地域貢献活動の取り組みには、さまざまな制約や困難が伴うと予想されます。そのような中、地域貢献活動の持つ魅力をしっかりと発信し続け、学生、教職員、その他活動に関わる一人ひとりの「物語づくり」をサポートすべく、地域連携室の役割を果たしていければと思います。これからも皆様方のご理解・ご協力を頂きますと幸いです。

最後に、これまで地域連携室の運営を支えて頂きました石丸美奈子さんと大谷芳子さんが本年度でご退職となります。

石丸さんは、2017 年度よりアドバイザーにご就任頂き、地域連携室や地域貢献活動のみならず、大学全体の運営に関しても、大変示唆に富む助言を行って頂きました。また、西南女学院の広報・宣伝ウーマン（私が勝手にそう思っています）として、さまざまな場や機会において、本学の PR を行って頂きました。エネルギッシュに活動されるお姿には、大きな刺激を受けました。

大谷さんは 2019 年度にご入職頂き、地域連携室の窓口として、学外からの活動依頼の対応を担って頂きました。また、学内に掲示する地域貢献活動の案内ポスターや SDGs パネルの作成もご担当頂きました。事務能力もさることながら、非凡なデザインセンスをお持ちであり、私自身、大変羨ましく思っておりました。

お二人のこれまでのご貢献に感謝いたしますとともに、今後のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

2021 年度の地域貢献活動と地域連携室の取り組み

学長　　浅野　嘉延

2016 年に開設した地域連携室は、学生と教職員が進める地域貢献活動を統括しながら、連携室独自の活動も行ってきています。地域貢献活動の量と質を順調に発展させてきましたが、2020 年からは新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けています。地域貢献活動の対象は高齢者や子供たちが中心ですので、多くの活動が中止あるいは縮小を余儀なくされました。しかし、感染対策に関する知識や技術も向上して、2021 年度は最大限の感染対策を行いながら段階的に地域貢献活動を再開しています。

それぞれの活動の詳細は地域活動論叢に記載されたとおりですが、本学の地域貢献活動で参加者に新型コロナウイルス感染が生じたことは一例もありません。主催する学生や教員の努力、地域連携室の指導、参加者の協力によるものです。これからも参加者や主催者の安全安心を最優先させながら、地域貢献活動を進めていただきたいと思います。

さて、地域連携室のアドバイザーを務めてくださった石丸美奈子さんが、2022 年 3 月で任期満了となります。 5 年間にわたって地域連携室だけでなく本学全体のことにも適切なアドバイスを頂戴しました。また、西南女学院の強力なサポーターとして、女学院の魅力を学外に発信してくださいました。コピーライターとしての感性、社会的に活躍されてきた経験、驚くほど広い人脈など、持てる力をフルに活用して、高い見地から様々にご指導していただいたことに心から感謝申し上げます。

石丸さんは高身長で颯爽とされてハキハキと発言されるので、最初は巴御前のような女傑のイメージでしたが、交流が続くうちに繊細で優しい静御前のような方であることが分かりました。経済界、教育界、政界など各界の名士たちが集ったイシマル組という秘密結社のような懇親会があるのも、石丸さんの暖かなお人柄によるものです。これから、我々も石丸組の一員として、石丸さんもチーム西女の一員として、お互いに交流を続けていけることを祈っています。

教育、研究、社会貢献は大学の 3 本柱です。現在、本学が社会に求められる大学であり続けるために「将来計画検討プロジェクト」を立ち上げています。このなかで社会貢献を推進するために、地域連携室の内容を見直しています。一日も早く新型コロナウイルスの感染拡大が収束し、バージョンアップした地域連携室を中心に本学の地域貢献活動が益々活性化されることを期待しています。

「花園に、山姥？５」

地域連携室アドバイザー　石丸 美奈子

１００年の乙女たちよ。

★

５年前、初めて、西南女学院大学の門を入った。

まさかの絶壁を前に、軽く眩暈が。

ワタシでアドバイザーが務まるのか？

相手は、１００年続くミッション系私立お嬢様学校。

大学まで公立+男女共学。仕事は、超マッチョな広告メディア業界。

こんな荒くれ山姥が、秘密の花園へ？

ひょっとしたら、女子ならではの、陰湿なイジメにあうかも（ハイ、偏見です）。

杞憂でした。

坂を上る途中で、鮮やかな花や木々の緑に癒され（桜の樹は、１５本）。

構内の清掃は行き届き、空気まで澄んだ感じ。

教職員は、紳士淑女で。おっとり。

学生たちの弾ける若さ、笑い声、礼儀正しさ。

チャペルは、長年のストレスを浄化してくれた。

生母が西南ＯＧ、という衝撃の事実も判明し。

封印してた、乙女ゴコロ、が完全覚醒。

多くの新しい学びもあり。

ほんとうに、幸せな、５年間、でした。

★

コホン、前置きはさておき。

２０２２年、西南女学院は、いよいよ１００周年を迎えます（パチパチパチ）。

本来なら、プレイベント目白押しだったはずの２０２１年でしたが。

新型コロナウイルス、第４・第５波襲来（現在第６波が猛威を）。

前年同様、地域連携活動もままならず。

それでも。知恵と工夫で、いくつかの催しが行われました。

★

１２月１日～１月５日。

井筒屋本館新館をつなぐ連絡通路（５階８階）にて、「１００年のあゆみ」写真展。

新学長三年越しの企画でした。

丁寧に書き込まれた説明文とともに、よくまあこんなに。

「写真資料の保存状態が良くて、選ぶの、大変だったんだよ」。嬉しそう。

１９２２年から２０２１年へ（大正～昭和～平成～令和）。

戦前戦中戦後、高度成長、オイルショック、バブル、リーマンショック、
二度の大震災、新型コロナウイルス蔓延。
まさに激動の１００年。
その中にあって、ミッション系私立女学院。よく生き延びました。
個人的には、モノクロ乙女たちに、うっとり。
利発そうで、信念を持ち、輝いてる。存外、現代風顔立ちだしね（美形！）。
西女の制服は、無敵だなあ（可愛い！）。
祈りと音楽は、いつの時代も。
求められる女性像には、変化が見られますね。
良妻賢母から職業婦人へ。プロフェッショナル、そしてリーダーへと。
しげしげ眺めてると、周りに人影が。デパートの常連と思しきご婦人方。
母娘で、お友達と、ご夫婦で。
「わたくしたち、卒業生なの」。
通路が一気にシオンの丘へ。
懐かしい誇らしい愛おしい、もっともっともっと母校を語りたい。

★
とにかく、ＯＧたちの母校愛が、ハンパない、のであります。
市民に向けた公開講座等、キャンパスを開放しての生涯教育に、
ウキウキ参加する（あの絶壁を上り）。
街なかやイベント会場で校歌が流れると、あたりかまわず、一緒に歌う＆涙する。
卒業して何十年にもなるのに、いまだに、仲良く付き合ってる。だって同級生だもん。
祖母から母、そして娘へ、３代に渡って通う（なかには、姉妹で、親類縁者も）。
教職員のＯＧ率も高い（奥様お嬢さんが、の場合も）。
まさに、乙女の結束！不動のシスターフッド、ファミリーなのであります。
そう言えば、イシマルの友人にも（デザイナー、編集者、ライター、
起業家、秘書、バーのママ・・・）。
みんな、お洒落でパワフル、情に厚く、頑張り屋さん、でもって、どこか夢見る少女。
西南ラブを胸に、北九州に定住し、バリバリ活躍してる。
★
１０月３０日。
オンライン講演会「コロナ禍と女性」。
４人のＯＧによるセミナーでした。
助産師・中学校英語教師・県警少年育成指導官・オペラ歌手（遥かオーストリアから登場）！
未曽有の災害と向き合う日々を語りました。
妊婦さんへのケア、学校での感染対策デジタル対応、少年少女たちの居場所。
「公演はできないけど、時々本番用の衣装を着て、歌ってるのよ」。

いずれも見事なプレゼンでした。
共通してるのは、建学の精神「感恩奉仕」。
全員が、世のため人のため働いてる。
コロナ禍は、シングルマザーや非正規、エッセンシャルワーカーの生活を脅かし。
生理の貧困やＤＶ、女性の自殺も増えました。
ＯＧたちは、医療や教育、芸術の分野から、メッセージを送り。
視聴した全国の人々や学生、講演会を裏方として支えた教職員への熱いエールとなりました。
★
２０２１年は、オリンピックパラリンピックイヤーでもありましたね。
メダル獲得に沸く一方で。これほどまでに、ジェンダー問題がクローズアップされた年もない。
エライ方々の辞任やお詫びが、相次ぎ。その度ニュースに。
この大きな潮流における、女子校の立ち位置って。
ジェンダー平等に逆行してる？いや却って、解決の糸口が？
ここでの時間と学びが、あの素晴らしいＯＧたちを育てたのだとしたら。
★
１０月１６日。
二年ぶりに、対面での、しおん祭（大学祭）。
午前と午後の、二部制、事前予約した学生と大学関係者のみでしたが。
芸能人ライブ・トークショウ、クイズ・カラオケ・ビンゴ大会・コンテスト。
企画運営を担った実行委員も、イベント参加者も観客も、大張り切り。
性による役割分担は存在しない。女子だからではなく、あくまで自分らしく。
ゲストには突っ込むし、歌だってファッションだって、イエイ。ＳＮＳは、フル稼働。
模擬店は出せなかったけど、キッチンカーが４台（ラーメンたこ焼き唐揚げクレープ）。
行列に並ぶのも、楽しいんだねえ。
★
動画配信にも、果敢に挑戦。
オープンキャンパスプレイベントや、観光案内（小倉北区役所からの依頼）、
クリスマスバージョンも。
画面越しに語りかけたり、門や坂、校舎でのイメージショットも、様になってきました。
撮影隊（職員）との息もぴったり。どんどん腕を上げてますなあ。
１００周年記念動画もサイコーでしたよ。
チャペルは、前期は、ユーチューブで。
後期は、マロリーホールでの対面＆配信で、行われました。
★
１２月１６日。
こちらも二年ぶりの、クリスマス礼拝。ソレイユホールにて。

感染対策、参加者限定、例年よりもコンパクトな内容でしたが。
キリスト生誕朗読音楽劇あり、スピーチ（英語・中国語）あり、
演奏（ピアノ・パイプオルガン・ハンドベル・バイオリン・フルート・クラリネット）、讃美歌。
出演は勿論、受付から会場案内、指導、司会、総合演出までを。学生教職員一丸となって。
そして、会場全体が、歌い祈った。
★
女学院ゆかりのジャクソン・Ｍ・ギャロット先生による講演「希望の光」＆祈祷も、印象的でした。
「その学びがあなたの要になる」。
「感恩奉仕」とともに、本学で、とても大切にされているフレーズですね。
この「要」という漢字が、西南女学院の「西」と「女」の組み合わせであることに気づき。
教育が人生において、根幹（要）となる、という意味を込め、使われるようになったのは、
ギャロット先生の父君、ウィリアム・Ｍ・ギャロット先生の発案だそうです。
１９３０年代に、来学。同じく教鞭をとっていた夫人と、ロウ講堂で結婚式を挙げたとのこと。
その後、理事長院長を務め。遺骨は、西南の森に埋葬されています。
「要」は、学生・教職員・ＯＧにとって、拠り所となる特別な言葉で。
２０１７年には、イメージキャラクター「要ちゃん」もデビュー！
★
その他、この一年、イシマルが参加参観出来た活動をご紹介。
３月８日。
前学長最終講義。
３月１９日。
卒業式。
４月２日。
入学式。
４月８日。
新学長の講義を参観（助産別科）。
５月３０日。
栄養学科と保育学科による「だいすきにっぽん」。オンラインで。
小・中学生対象に、食とあそび、ことばを通して、日本の伝統文化に触れてもらう講座。
７月１２日。
福祉学科の授業参観。ボランティアに関するもの。
７月１８日。
オープンキャンパス。時間短縮開催の中、駆け足で視察。第二回目（８月２１日）にも参加。
看護学科による白衣の変遷、保育学科の音楽療育、栄養学科の味覚実験などなど。
小倉駅行き送迎バスにも、同乗体験（高校生・親御さんと）。
セントシティ７Ｆ福銀パレットで、地元各大学のＳＤＧs取り組み発表（ポスター＆映像）視察。

同喜久屋書店で、保育科お勧めの絵本展にも。
１１月１３日。
英語学科による「第三回ＫＡＮＡＭＥ杯」。去年に続きオンラインでの開催。
高校生による英語スピーチ大会。本選に残ったのは１５名。西南女学院高校の生徒が優勝！
１０月２６日～１２月７日（毎週火曜）。
「市民カレッジ」。今年度は、観光文化学科と英語学科、保育科が担当。
国際感覚、文化、絵本の読み聞かせや、詩、英語習得法、最後はマロリーホールで音楽。
１２月３日。
北九州ゆめみらいワーク。西日本総合展示場で。
地元企業・大学等が、高校生向けに、ＰＲするイベント。本学ブースを応援に。
１２月１８日。
英語学科による、オンライン講座「Let's think!」。
小学５・６年生対象。英語を使う仕事について＆クリスマスに関するクイズなど。
１月１３日。
観光文化学科によるプレゼン。関門海峡にデビューする観光クルーズ船の活用提案。
関係企業行政からの出席者を前に、Ｚ世代パワー炸裂。
加えて。
月二回の会議出席と、月二本のエッセイ執筆。
★
西南女学院大学。看護福祉栄養英語観光文化保育助産。
資格を取って、研鑽を積み、第一線で輝く女性へ。
地域密着、日本各地、海外にだって。
望むなら、恋愛結婚出産育児等、も手放さずにね。
ＬＧＢＴＱ、ＳＤＧs。しっかり向き合いながら。
あくまで、自分らしく。
シオンの丘で過ごした青春を糧に。
次の時代を、よりたくましく、美しく、進め。
キミたちには、いつだって仲間がいる、祈りがある音楽がある。
「感恩奉仕」「その学びがあなたの要となる」を、旗印に。
★
そうして、山姥は、ゆっくり坂を下る。花園を後にする。
ありがとう。
１００年の乙女たち！

【石丸氏のプロフィール】

コピーライター
西日本工業大学評議員
北九州マラソン実行委員
コピーライターとしてのデビュー作は、マルショク・サンリブ「生活は生もの。」。
八幡東区「響ホール」の名付け親でもある。
これまでにユニクロ、新日鉄、花キューピッド等の広告制作及び、
北九州市（周年事業）福間町(現・福津市総合計画）等自治体の広報を担当。
また、１９８７年北九州ミズ２１委員就任をきっかけに３０年にわたり、
ＮＨＫ九州沖縄地方番組審議委員、福岡県行政改革審議委員、
（公財）北九州市芸術文化振興財団理事他、観光振興・教育文化芸術振興・街づくり等の各委員会委員を歴任。
この１５年ほどは、外部アドバイザーとして、北九州モノレール社外取締役、井筒屋アドバイザー、西日本新聞北九州本社アドバイザー、北九州市立大学広報アドバイザーに就任。
プライベートでは、毎年夏と冬に超異業種交流会（イシマル組）を主催。
著書に「夕刊を読む女。」がある。

石丸美奈子アドバイザー　５年間ありがとうございました！

２０１７年４月から地域連携室のアドバイザーに就任していただきました。毎月の会議のなかで、私たちが気づかない、本学の魅力を再確認する機会を与えてくださったり、誰もが言いにくい問題や課題を指摘してくださったりと、多くのご助言をいただきました。真剣に本学のことを想ってのアドバイスは、感謝に堪えません。

寒い体育館での活動見学の一コマ

2019 年度地域貢献活動交流会にて

イシマル組主催還暦誕生パーティーにて

石丸アドバイザーのネットワークから多くの方を紹介してくださり、マスコミとの懇親会を開催、イシマル組という石丸さんを囲んでの異業種交流会組織主催の誕生パーティーにも参加させていただきました。また石丸さんから講師の方を紹介していただき、講演会を開催することもできました。

2018 年度イラストレーター わたせせいぞう氏講演会(COC＋講演会講師)にて

2018 年度関西大学 江川直樹教授祝賀パーティ(COC＋講演会講師)にて

コロナ禍となった 2020 年から、毎月 2 本のエッセーを執筆してくださいました。その時々の本学の行事や活動を紹介しつつ、社会情勢や流行の芸術・文化や世相について書いていただきました。

エッセー タイトル一覧

2021 年	2 月	「わきまえない女」「フクマーズエンジェル」
	3 月	「打つべきか打たざるべきか」「在宅ひとり死のススメ」
	4 月	「旅する想い」「石丸美奈子」
	5 月	「おかえりモネ」「ノマドランド」
	6 月	「祈りイロイロ」「さらば愛しき」
	7 月	「体幹でありんす」「それでもまだ、朝刊を読む女」
	8 月	「ニューフェイス登場」「なまえのないねこ」
	9 月	「マスク、再び」「ロックだぜ」
	１０月	「キミは、天然色」「TIME & MONEY」
	１１月	「クリスマスツリー」「ワタシは、一行のコピー」
	１２月	「カムカム婆」「ココロの旅」
2022 年	1 月	「Ｚの挑戦」「スーパーな日々」
	2 月	「最終回でござる」「大学へ行こう」

西南女学院大学と西南女学院大学短期大学部の地域貢献活動（概要）

本学では感恩奉仕の建学の精神にもとづき、豊かな人間力と専門的な実践力で社会に貢献する人材育成を目指しています。座学に加え、学生たちが自ら学外に出向き、さまざまな課題に向き合い、できることをみつけていくことを大切にして参りました。これまでの学生参加の地域貢献活動を活動形態別にみますと次の６つに分けることができます。

① 市民公開講座：最新の知識・技術、生活の知恵などを提供する講義や演習
② 体験・アクティビティ：あそぶ、たべる、学ぶ、語り合うなどの体験型の企画
③ ピアサポートグループ活動：介護や子育ての悩みなどを参加者同士で受けとめ支え合うグループ活動
④ 提案とアクション：若い女性の視点を取り入れた商品開発や地域活性化への提案とアクション
⑤ 海外における貢献活動：アジア地域での地域貢献活動
⑥ そのほか

また、課題別にみると次の６つに分けることができます。

① 健康・食・運動　② 福祉・介護　③ 子ども・子育て　④ 学校教育
⑤ 産業・観光　⑥ 地域づくり

2021 年の地域貢献活動は 10 件でした。『地域活動論叢 2021』では、課題別に＜子ども・子育て支援と学校教育＞及び＜食と健康＞＜観光と地域活性化＞に分類し（下表参照)、それぞれの 1 年間の成果と課題をまとめました。本書は、この１年間の学生たちと教職員が地域の皆様とともに歩んだ道のりをコンパクトにまとめたものであります。これらが地域の皆様と私たちにとって共通の宝物となりますことを祈念しております。

表　2021 年度に本学で実施された地域貢献活動

＜子ども・子育て支援と学校教育＞
- 一緒にあそぼう　［障害のある子どもとそのきょうだい］
- いぼりの森の《みんな、だぁ～い好き！！》“みんな♪フレアイ隊”［地域の未就園児］
- だいすきにっぽん［小・中学生］
- Let's Think! のぞいてみよう、英語を使う仕事　［小学５，６年生］

＜食と健康＞
- なし

＜観光と地域活性化＞
- SNS を活用したインバウンド集客研修　［外国人観光客］
- 北九州市「SDGs 未来モデル発信」　［一般市民］
- 小倉北区魅力向上事業［北九州市内および市街近隣エリアの市民］
- 地域プロジェクト：Eco-SeTRA プロジェクト　［一般市民、観光客］
- まち歩きイベントの企画と北九州市の情報発信　［観光客］
- 行橋市（および観光庁)「海と山を一度に堪能できる体験観光コンテンツ」開発事業　［観光客］

注）［　　］内は協働のパートナーあるいは支援の対象です。

１．企画名：一緒にあそぼう

２．団体名：ちゃれんじ

３．企画代表者　西南女学院大学保健福祉学部福祉学科　山本　佳代子

４．概要

（１）目的

障害のある子どもときょうだい、その家族を対象とし余暇活動支援を行う。さまざまなレクリエーション活動を通し、子どもたちが楽しく体を動かしながら多様な動きを身につけること、仲間と体験を共有し、一緒に遊ぶ楽しさを知ることを目的とする。またスタッフとして参加する学生は、子どもたちとの関わりを通し、障害についての理解を深めること、場面に応じた声かけや関わり方、プログラムの企画や実践の方法について学ぶことを目的とする。

①対象：障害のある子どもときょうだい、その家族

②内容：体育館でのレクリエーション活動・水泳活動・食育活動・野外活動

③活動場所：西南女学院大学第二体育館・障害者スポーツセンター（アレアス）・足立青少年の家
グリーンパーク

（２）実施日時・場所・参加者数・実施内容

日程	時間	場所	内容	参加者	スタッフ
7月24日（土）	10時から12時	グリーンパーク	かぼちゃの収穫	子ども　6名 保護者　5名	12名
8月12日（木）	14時から15時	Google　meet	足立デイキャンプリーダー会議		5名
9月5日（日）	13時から14時半	Google　meet	足立デイキャンプリーダー会議		5名
9月22日（水）	10時から11時	Google　meet	足立デイキャンプリーダー会議		5名
10月23日（土）	9時から15時	足立青少年の家	デイキャンプスタッフリハーサル		29名
11月11日（木）	11時から12時	福祉学科実習指導室	足立デイキャンプリーダー会議		6名
12月4日（土）	9時から15時	大学調理室	親子クッキング	子ども　6名 保護者　5名	11名

（３）インシデントの有無

なし

５．評価及び企画の妥当性と今後の課題

コロナ禍であり、感染拡大の時期と重なり水泳活動や野外活動等、予定していた活動を実施することができなかった。オンラインでの開催についても検討したが、参加者側の環境が整わず実施が困難であった。

活動意欲のあるスタッフのモチベーション維持、スタッフ間のコミュニケーション促進に向けた取り組みを検討したい。

6．決算

西南女学院大学地域貢献活動助成金

7．謝辞

デイキャンプスタッフミーティングをご指導いただきました、北九州市立大学の村江史年先生、食育活動に一緒に取り組んでいただいた栄養学科の山田志麻先生とグリーンパークの皆様に心より感謝申し上げます。

8．写真資料

かぼちゃの収穫（グリーンパーク）

かぼちゃの調理（大学調理実習室）

デイキャンプスタッフ事前トレーニング（足立青少年の家）

1．企画名　　いぼりの森≪みんな、だぁ～い好き！！≫

みんな♪フレアイ隊

2．主催者名　　北九州市立井堀市民センター

3．企画代表者　西南女学院大学短期大学部保育科　藤田稔子

4．概要

（1）活動の概要と目的

毎年、校区内にある北九州市立井堀市民センターで月１回、０・１・２歳のお子さんと保護者を対象に子育て支援活動を月に１回のペースで続け、今年で６年目になります。

昨年度、新型コロナウィルス感染症に伴う相次ぐ「緊急事態宣言」発令等により子ども達との触れ合っての活動ができず、学生達発案のYouTube配信を中心に活動しました。

今年度も前期は、感染状況を鑑み市民センターに出向いての活動は見送り、テーマを絞って昨年度開設したYouTubeチャンネルも活用しながら細々活動を継続しました。後期に入ってからは、市民センターと共に感染症対策を万全に講じながら、市民センターでの開催を再開しました。

（2）内容

①　2021年度前期

テーマ：お家で簡単に作って遊べるおもちゃ作り

内　容：季節にあったおもちゃを、親子で簡単に作れるよう「キット」を準備し、市民センターに訪れた親子が無料で誰でも持って帰ることができるようにしました。「キット」は、材料を準備するだけでなく、例えば、穴をあけておくなど、乳児が側にいると危ないような工程はすでに済ませた状態のものを「キット」として用いました。また、乳児であっても一緒に作業できるようなアイテムも「キット」に含めました。作り方及び遊び方は、YouTubeに動画でアップロードし、「キット」と一緒にYouTubeチャンネルのQRコードを添えておきました。

②　市民センターでの活動

再開にあたっては、本学COVID-19対策斑に感染症対策の詳細を提出し、承認を得て実施しました。

今年度の内容は、他家族との身体的接触がないような内容を企画することにし、「ごっこあそび」を中心としたものにしました。また、参加者は事前にセンターに申し込みされた親子に限定し、人数が多くならないようセンターが配慮してくれました。

各回、「手あそび→絵本の読み聞かせ→メインのあそび」と展開するようにプログラムを構成しました。

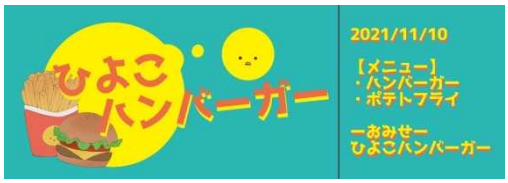
各回の内容及び参加者数は次の通りです。

11 月 10 日（水）　テーマ：ドライブスルー（ハンバーガーやさん）

参加者：子ども　４名、保護者　５名

＊ドライブスルーにすることで、子ども達はクルマに乗るため、他児との接触を回避させるという工夫をしました。

＊お家でも繰り返し遊べるようにハンバーガーやポテトをフエルトで多めに作成しました。



12 月 1 日（水）　　テーマ：クリスマスマーケット

参加者：子ども　５名、保護者　５名

＊子ども達がお家でおままごとができるようなものだけでなく、お母さま向けにおしゃれなクリスマスリースも作成しました。

＊子どもの成長の記念に、手形をとりクリスマスプレゼントとしてお持ち帰りしてもらいました。

1 月 5 日（水）　　テーマ：今年の干支と鯛を釣る

参加者：子ども　10 名、保護者　５名

＊「十日戎」からの発想で「鯛」を釣り、おめでたいお正月をお祝いする会にしました。

＊沢山釣れた子ども達には、十二支をはじめとする動物の帽子がもらえます。

＊大きな「寅」を通り抜けて出発！「鯛」を釣ったら帰りも大きな「寅」を通り抜けてバイバイ

5．振り返り

今年度も準備を進めていたのに、開催を断念もしくは方法を変更等せざるを得ない状況が続きました。しかし、このことは、①状況把握と判断、特に「何を」「今」一番に考えなければならないのか、②リスクの想定、③「臨機応変」「柔軟性」をもって状況に合わせて変化させる、④短期間で完成させる、力を養うことができたと評価しています。参加する親子も、学生達も、市民センター職員も、全ての人の命の安全を第一とし、参加する側のニーズと満足度を追求することができた１年であったと思います。

6．活動経費

井堀市民センターと本学地域連携室からの助成金等で材料費を支出いただきました。

7．今後の課題

今までの感染症対策や所謂新しい生活様式によって習慣化されたことでの気のゆるみが生じることなく、常に細心の注意を怠らず開催を続けることが最も大切な課題であると認識しています。

8．お礼

今年度も、開催日直前までの変更等に臨機応変に対応をしていただき、また、様々な感染症対策を共に担ってくださいました井堀市民センターの皆さまに心から感謝申し上げます。また、感染対策にあたっては、地域連携室並びに COVID-19 対策班の諸先生方に度々ご助言を賜り、心からお礼申します。

そして、何より、いつも楽しみにしてくれている子ども達とお母さまにたくさんの「ありがとう」を♡

１．企画名

だいすき　にっぽん

子どもたちに伝えたい「食」と「あそび」と「ことば」

２．主催者名　　『だいすき　にっぽん』実行委員会

３．企画代表者　　西南女学院大学保健福祉学部　栄養学科　青木るみ子
西南女学院大学短期大学部　　保育科　　藤田稔子

４．概要

（１）活動の経緯

本活動は、2014 年度から継続している小学生向けの「日本文化」に特化した活動です。プログラムは大きく 3 つ「食（食育）」「あそび」「ことば」を柱に各回テーマに沿って関連しながら参加者である児童が体験しながら楽しく学べるよう構成しています。従来は、「食（食育）」では、日本の伝統的な行事食や地元北九州産の野菜や魚介類を用いて調理し、皆で喫食します。時には蕎麦職人や地元漁師、北九州市産業局の職員も加わり、食を取り巻く現状の講演や学生達によるプレゼンテーションを通して知識を得たのち、学生・児童・保護者と一緒に調理をします。「あそび」では、日本の伝承遊びをはじめ、友禅和紙を用いた製作遊びや染物等、時には専門家をお招きして児童と学生がペアになり作業を進めていきます。「ことば」では、その時のテーマに即して、例えば、「茶」がつく慣用句のかるたあそびや雨にまつわる漢字などゲームを通して学びます。しかし、2020 年度も例年通りの企画を立てていましたが、新型コロナウィルス感染拡大により、開催中止を余儀なくされました。2021 年度は、急な中止や感染を恐れるために参加することを断念してしまうことがないよう、急な中止に備えかつご家庭によっては感染リスクから来校を恐れる方々にも対応できるよう、従来の来校して一緒に活動するだけでなく、自宅からオンラインでも参加できるように参加方法を多様化してみました。

（２）活動の詳細

参加者である地域の小学生が『真の国際人』として自国を熟知し、誇れるようになることを目標としています。そのためのきっかけとなり得るために本プログラムは以下の目標を持って構成しています。

①日本の伝統的食文化「和食」の食材、調理、行事食等の“料理”そのものから、込められた願いや日本の気候・土地に即した食文化まで学べる
②日本の「伝承あそび」を実際に経験し、日本の風土から生まれる技術等を体験する
③日本の美しい四季から生まれた「ことば」、国字等に興味をもつ
④親子で参加することで、家庭においても話題にできる

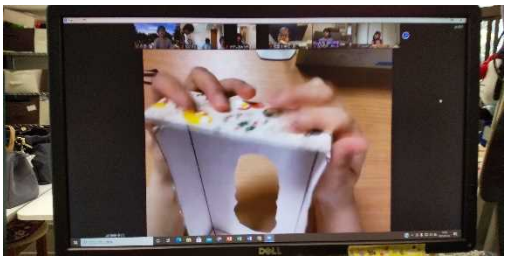
今年度の開催方法は、参加申し込み時に選べるように 2 種類設けました。

・「来校型」：大学に来ていただいて、学生達と一緒に調理・製作あそび等をします。
・「オンライン型」：参加者は自宅で zoom を通し会場と繋げることによって一緒に作業します
＊ただし、福岡県内緊急事態宣言が発令されるなど、大学に学外者が入ることができない状況になった場合は、全て zoom での「オンライン型」で参加していただくようあらかじめ説明をしておきました。

（３）内容および参加人数

第１回：5 月 30 日（日）　　参加者：16 名　（全員　オンライン型）

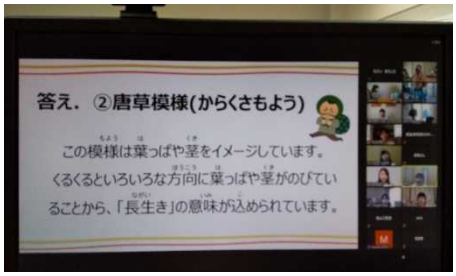
「あそび」和柄のティッシュケース作り　　＊事前に友禅和紙等材料は郵送等でお届けしました



作業中は↑の様に画面固定してもらいます。　↑工程毎に確認しながら進めます

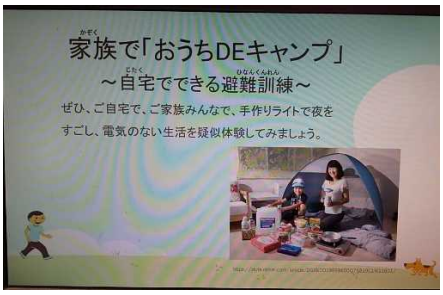
「食」災害に備えた準備を学生が作成したスライドを用いて説明後、災害時でも可能なビニール袋とお鍋を用いて２種類の蒸しパンを作りました

「ことば」日本特有の紋様をクイズ形式で学びました



第２回：11 月 23 日（祝・火）　　参加者：9 名　（全員　来校型）

「あそび」ランタンの歴史や祭典等スライドを用いて説明後、和紙を使ったランタンを作りました。また、自然災害時の避難生活、特に、ライフラインの有難さと電気が使えない生活のことをともに考える機会を設けました



「食」旬の食材についてスライドで学んだあと、お芋と林檎を用いた焼き菓子を作りました

「ことば」勤労感謝の日にちなんで、お礼状を書きました

５．評価

今年度は、北九州市教育委員会に様々なご助言を賜り、後援を得ることができました。その過程で、「『だいすきにっぽん』実行委員会規約」を作成することとなり、本活動の運営の在り方を整理する機会に恵まれました。規約の成立に伴い、より一層学生スタッフの主体性や責任感がクローズアップされたように感じています。

応募状況については、感染症が流行し始める時期と重なり、なかなか難しい状況に立たされましたが、参加者からは「楽しかった」「また、絶対に来るね」という言葉を多く送ってくれ、開催後に保護者からのお礼のメールを複数いただけました。

６．活動経費

参加費　（来校型のみ）￥500

芳賀文化財団、全国栄養士養成施設協会、本学地域連携室　より助成を受けました

７．今後の課題

今年度は、市の教育委員会のご協力を得て、市内小学校への広報ができましたが、感染状況が悪化する時期と重なり、この広報活動が実を結ぶことができませんでした。今後も感染が終息しない限り、臨機応変な対応を迫られるとは思いますが、学生スタッフのモチベーションを保ちつつ、後継者（次の学年の幹部学生）への引継ぎもできるよう頑張っていきたいと思っています。

８．御礼

コロナ禍での開催で不安を抱える中、芳賀文化財団からの心あたたまる励ましのメッセージと活動助成金を賜りましたことは、実行委員会一同心より感謝しております。また、地域連携室並びにCOVID-19対策班の皆さまには、度々のご相談等に親身に対応してくださいましたことお礼申し上げます。

最後に、実行委員として牽引してくれる福祉学科・栄養学科の幹部学生、ボランティアとして参加してくれる看護学科・福祉学科・栄養学科の学生のみなさん、そして！参加してくれた子ども達、開催できなくて会えなかった子ども達にも心からの「ありがとう」を。

以上

1.企画名：Let's Think のぞいてみよう、英語を使う仕事
2.団体名：太田かおりゼミ（３年次）
3.企画代表者：西南女学院大学人文学部英語学科 太田かおり
4.メンバー：英語学科 3 年 井上響木、尾上未佳、川口嘉子、木本七美、手島亜由美、原愛生、本田蒼依、道城友里愛（8 名）
5.参加者：3 名
6.概要

（1）活動目的

本活動の目的は次の二つである。第一に、中学校に入学する前の段階で小学生児童に英語を話すことや聞くことが楽しいと感じてもらうことである。第二の目的は、海外で活躍する日本人の仕事や SDGs について触れる活動を通して、相手の意見を受け入れる力、自分の考えを伝える力、推測する力を養うことである。

①対象者：北九州市内の小学校５・６年生
②実施方法：Zoom を使用したオンラインでの実施
③実施日時：2021 年 12 月 18 日（土）13:30～15:00

(2)事前準備

(広報活動について)

広報班では、SNS やチラシ等で参加者を募るための準備を行った。活動内容は、主に次の５つである。

①参加申込みフォームの作成:　Google フォームを使用し、参加申込み受付を行った。
②ポスター、チラシの作成:　ポスターとチラシを作成した。
③インスタグラムアカウントの開設:　アカウント名　Let's Think!イベント運営部(@letsthink.2021)でインスタグラムを開設し、活動への参加を呼びかける情報配信を行った。
④ポスター、チラシの配布:　井堀小学校、北九州市役所広報室広報課、学習塾、郵便局等を訪問し、学生の知人等にも配布して参加を呼びかけた。
⑤参加当日 URL 送付用メールの作成:　当日の Zoom の URL 配信用のメールアドレスを作成した。

(アクティビティ活動について)

ゲーム班では、当日実施するゲームを楽しんでもらうために、主に次の３つの活動を行った。

①ゲーム内容の考案
②当日使うパワーポイントの作成
③参加者への景品選び

(3)当日のスケジュール

①あいさつ
　・リーダーの挨拶
　・学生の自己紹介
②アイスブレイク
　・ヒーローインタビュー
　・ポーズそろうかな？ゲーム
③職業に関するレクチャー
④単語連想ゲーム
⑤◯×ゲーム
⑥最後の挨拶

(4)事後活動

イベント終了後、参加者に対してアンケートを実施した。回答内容（一部抜粋）は以下のとおりである。
①なぜ当イベントに参加しようと思いましたか？
・小学生向けのオンライン英語講座に興味があったから。
・英語に興味があったので。
・英語が好きで面白そうだったから。
②アクティビティで使用した英語のレベルはどうでしたか？
・丁度良かった。（参加者全員）
③アクティビティを通しての感想
・新しい発見があり楽しかった。
・学んだこともあったので良かった。
・〇×ゲームのクリスマスに纏わる問題で生きている七面鳥と丸焼けの七面鳥の画像を並べていましたが少しブラックだったと思う。
④またこのようなイベントに参加したいですか？
・参加したい。（参加者全員）
⑤当イベントの感想
・是非続けてください！
・とても楽しかったのでまたやりたい。
・英語に興味があるのでまた参加したい。

アンケートにお答えいただいた参加者のみなさんに、参加賞として学生全員のメッセージを書き添えたクリスマスカードを郵送にて贈った。

(5)活動を振り返って

ゼミ生全員がプロジェクトの企画や広報活動に初めて挑戦した。試行錯誤しながらも、互いに協力し合い、最終的に大きな達成感を感じる活動を行うことができた。新型コロナウイルスの影響でオンライン開催となり、zoom に不慣れな参加者がいたため対応が必要となったが、臨機応変に対応し、スムーズに進行することができた。最後に、プロジェクトを進める中で８名全員が協力して取り組むことの大切さを学んだ。参加者は３名と少なかったものの、学生が参加者一人ひとりと丁寧に向き合うことができ、参加者と学生全員がともに笑顔で活動を終えることができ、充実した活動となった。

(6) 今後の課題

<準備>
・小学生の英語教育のレベルを想像しにくく、活動内容を決定するのに時間がかかってしまった。
・準備の段階で、広報班とゲーム班の間での情報共有が十分にできていなかった。
・SNS を通じた広報宣伝活動が〆切間際になってしまった。

→広報活動では、ポスターやチラシの配布、インスタグラム開設や井堀小学校への訪問など、多くの手段を講じたものの、多くの参加者を集めるには至らなかった。この経験を通して、いかに参加者を集めることが難しいかについて体験的に学ぶことができたが、想定していたよりも参加人数が少なかったため、今後は分担ではなくゼミ生全員で早期から広報活動を開始し、大学周辺のより多くの小学校へ広報活動の幅を広げるなどさらなる広報活動を工夫したい。

<当日>
・Zoom の使い方や接続方法がわからない参加者がいた。
・全体的に原稿を見ながら話すことが多かったため、カメラを見て話すことができたら良かった。

・活動中、自分の担当が終わると笑顔が途絶えてしまった。
・同部屋にいる人が同時にミュートを外したら、どちらかのマイクに声が入ってしまっている場面があった。
・参加者が将来なりたい職業を教えてくれた時、なりたい職業の英単語を教えることができなかった。
・共有画面を見てほしい時に、参加者の顔がよく下がっていた。

→zoom の使い方を詳しく説明したり、事前に接続確認をしてもらったりすることが足りなかった。また、常に笑顔で活動を行えるように、カメラを見ながら話したりする練習やマイクの調節を含めたリハーサルをもっと重ねておくとよかった。参加者のなりたい職業についての英単語を即座に答えられなかったため、事前に参加者に聞いたり、予想して英単語を調べたりしておくとさらによかった。

（7）謝辞

「Let’s Think のぞいてみよう、英語を使う仕事」の英語活動にご参加頂いた皆様に感謝致します。また、子供たちが楽しく活動を行えるように、活動の企画、参加の募集、事前準備、当日の運営、共に活動を作り上げてくれたゼミ生に感謝申し上げます。また、この活動の支援をいただいた地域連携室の皆様にも心より感謝申し上げます。最後に、英語活動を実施するにあたりご協力頂いた地域の皆様、英語活動を一緒に取り組んで頂いたゼミ担当の太田かおり先生に心から感謝申し上げます。

1. 企画名： SNS を活用したインバウンド集客研修

2. 主催者名：西南女学院大学人文学部観光文化学科

3. 企画代表者：西南女学院大学人文学部観光文化学科　劉 明

4. 概要

（1）活動の経緯と目的

本プロジェクトの目的は、中韓に対して北九州市のシティプロモーションを行うために、SNS で情報発信を行うこと。具体的には、外国人観光客のニーズを反映した「北九州市を知ってもらう旅行プラン」を作成し、旅行プランで選択した観光地に関する写真及び記事を SNS 上に投稿し、外国人観光客を誘致することが成果となっている。

この SNS での情報発信活動は、コロナウイルス感染が世界的に蔓延し始めた頃に始まった。世界中の人々の日常が制限され、旅行に行くことも叶わない中で、北九州市の活気も以前より大幅に減少した。そのような中で、コロナウイルス終息後に、また元の北九州市以上に活気のある市になって欲しいという私たちの想いがあった。

そこで、コロナウイルス終息後を見据えて、SNS という一つのツールを使用することで、より多くの「日本に行きたい、特に北九州に行きたい」と思っている未来の外国人観光客の方々へ情報を届けることができるのではないかと考えたことが活動の経緯である。

（2）活動内容・活動場所・活動内容の詳細

活動内容	活動場所	活動内容の詳細
北九州市役所の方々・留学生とのミーティング	オンライン	詳細な内容等を決定するために、１０回程度の打ち合わせを実施。
観光スポットの選定	オンライン	留学生の方の意見も聞き、北九州市の魅力が伝わるように観光スポットを選定。
取材	主にオンライン（行くことが可能な場合は現地で調査）	行動の出来る範囲内で選定したスポットを実際に巡り、感じたことを活動に反映させる。
記事の作成	オンライン	SNS 上で目に留まるにはどのようにしたら良いかを考え、記事を作成する。

5. 活動を振り返って

活動を振り返るためのアンケートを実施し、全員からの意見を集約した。

(1) 活動を通して楽しかったことや難しかったこと、得たものは何ですか。

＜楽しかったこと＞

・北九州市の魅力の再発見ができたこと。

・写真を用いた情報発信をすること。

・観光地調べなど、自身の知らないことを積極的に調べること。

・留学生との交流で異文化に触れることで、異なる視点から北九州の情報や想いを知れたこと。

＜難しかったこと＞

・海外向けの発信のため、相手に分かりやすく魅力が伝わるように文章を書くこと。

・「外国人向け」というのがキーポイントでまとめること。

・見やすさだけでなく、読みたいと思えるような記事の作成を何度も訂正しながら取り組んだこと。

＜得たもの＞

・今まで知らなかった北九州のことが知れた。

・留学生の意見を聞く機会はとても貴重な経験だったし、印象に残っている。

(2) 活動を通して、自分自身が何か変化したことがあれば教えてください。

・北九州の知らなかった観光の現状が見えたので、良さ、反対に改善点も気づけたこと。

・出身地域や福岡県、さらには九州の良さを知りたいと思うようになったこと。

・北九州の良いところなどを探しながら歩くようになったし、日常生活で魅力になり得そうなものを探すようになったこと。

・他地域の隠れた名所や魅力を再発見して、実際に訪れてみたいと思ったこと。

・今まで以上に色々なものを撮影するようになったこと。

・人々に北九州の魅力を伝えられる知識が増えたこと。

(3) 今後に生かせることはありますか。また、それはどのようなことですか。

・日本人観光客と海外観光客では求めているものが異なると言うことを学び、ターゲットの視点に立ち発想することで、新たな発見が見えてくるということ。

・活動の中で提出期限のある事柄が多かったため、計画性を持ちチームで協力しながら物事を進めることの大切さ。

・発信する内容だけでなく、発信する媒体をリサーチしたり、実際に発信される際の見え方にもこだわったりしたので、細部まで相手を気遣う（心配り）の大切さ。

6. 活動経費

中韓 SNS 観光情報発信活動助成金：５万円。

7. 謝辞

中韓 SNS 観光情報発信活動にご指導いただいた北九州市企画調整局国際部国際政策課の皆様ならびに多大なご協力をいただいた西南女学院大学及び観光文化学科の教職員・学生の皆様に対し、感謝の意を申し上げます。

8. 添付資料

中韓 SNS 観光情報発信活動実施時の様子（写真資料）

中韓 SNS 観光情報発信活動の様子

1.企画名北九州市「SDGs 未来モデル発信」プロジェクト

2.主催者名　　北九州市 SDGs 推進課、 株式会社朝日広告社
3.企画代表者　西南女学院大学 人文学部観光文化学科 高橋幸夫
4.参加者　　観光文化学科 3 年　菅本美空、加來優梨亜、大塚千尋
5.概要

（1）背景及び目的

北九州市は、2018 年に他 28 自治体とともに全国で初めての「SDGs 未来都市」に選定された。日本でも有数の“地域一体となって「SDGs」に取り組む街”の一つとされている北九州市には、SDGs に取り組む企業が数多くある。しかし、企業自体が SDGs に関係していることに気づいていない、またはその取り組みが注目されていない企業がある。そこで、SDGs の達成目標である「2030 年」に社会の第 1 線に立っている学生が SDGs に取り組む企業を取材することで、学生が地域の企業と直接的につながり、企業の魅力を発見するとともに、情報発信の実践的な学習の機会を創出することを目的としている。

（2）活動内容

①北九州の地域企業である「株式会社資さん」への取材
②取材を基に AR を作成
・プロの AR 企業によるオンライン講義を受け、学生自らが本格的な AR コンテンツ制作スキルを習得する。企業の SDGs の取り組み背景にある課題や取り組んだ結果を基に AR 動画の内容を事前に考え、制作する。
③AR コンテンツを含めた動画コンテンツを制作
・制作した AR コンテンツや取材時の風景、SDGs に関する企業の取り組み詳細、企業の方の声等を 3～5 分程度で一つの動画として仕上げる。
【動画展開内容】取材先企業紹介→取材動画→AR 動画→企業の声→取材結果まとめ

▼具体的な活動スケジュール

	活動日	内容
1	9 月 8 日（水）	ZOOM ミーティング ・希望取材先のヒアリング・今後の日程確認等
2	10 月 25 日（月）	学生オリエンテーション ・北九州市役所 SDGs 推進室 上田室長による SDGs 特別講演会 ・プロジェクトのスケジュールについて
3	11 月 11 日（木）	ディレクターとのオンラインミーティング ・取材内容や構成について

		・AR について
4	11 月 19 日（金）	「伝燈と志命」第 8 回 地方創生経営者フォーラムへの参加 ・本プロジェクト紹介時にステージへ登壇 ・北九州市の企業経営者によるディスカッションを聞き、 SDGs への理解を深める。
5	11 月 29 日（月）	株式会社資さん本社にて取材・撮影 取材・撮影終了後、第一回 AR アプリ開発オンライン講義受講
6	12 月 2 日（木）	朝日広告社にて動画内の学生発表パートを撮影
7	12 月 6 日（月）	第二回 AR アプリ開発オンライン講義・AR コンテンツ作成
8	12 月 13 日（月）	第三回 AR アプリ開発オンライン講義・AR コンテンツ作成
9	12 月中旬～1 月上旬	動画コンテンツ制作 ・制作した AR コンテンツや取材映像を一つの動画として仕上げる
10	1 月下旬	動画完成
11	3 月～	順次公開

6.活動を振り返って

〇参加した動機

北九州市内の企業へ直接取材、インタビューすることができるのは大変貴重な機会である。また、ARアプリを開発することは学生にとって初めての試みであり不安も大きかったが、今まで経験したことのない分野にも挑戦させたいと思い、参加を促した。

〇活動を通して、得たもの、難しかったもの、楽しかったこと（学生の声）

・アプリ上のアニメーションの動きをつけるために、細かい設定をするなど非常に時間がかかったが、成功したときには達成感を感じた。

・3 人で 1 つのものをつくり上げるという成功体験を得ることができた。

・撮影の際にはカメラマンの方、ディレクターの方も一緒に撮影に同行していただき、本格的な取材・撮影を経験できたことが楽しかった。

〇今後に活かせること（学生の声）

今後本格的に始まる就職活動において、取材でお伺いしたお話や SDGs への理解は業界研究などにつなげていきたい。また、最新の AR 動画やアプリ開発等を経験したことで、今後非常に役に立つと考える。今回のプロジェクトを通して、これから積極的に苦手分野や新たなことに挑戦していきたい。

7.謝辞

北九州市役所 SDGs 推進課の皆様をはじめ、全体をサポートしてくださった朝日広告社様、AR のご指導をしていただきました FIFTEEN　MINUTES 様、取材時に撮影してくださいましたディレクターの皆様の多大なるご協力のもと一つの作品として完結することができましたこと御礼申し上げます。

８.添付資料

北九州市「SDGs 未来モデル発信」プロジェクト活動の様子（写真資料）

写真１：学生オリエンテーション

写真２：AR 講義

写真３：株式会社資さんへ取材

写真４：動画撮影

写真５:AR 動画

写真６：Google Play ストア上に表示される画像

1，企画名　　小倉北区魅力向上事業

2，主催者名　　小倉北区役所総務企画課

3，企画代表者　　西南女学院大学　人文学部観光文化学科　高橋幸夫

4，参加者　　観光文化学科３年　大和夏希、岩崎亜海、安村佳夏、岡田巳月、尾上萌楓、洌鎌彩樺、寺松舞、中村夏菜

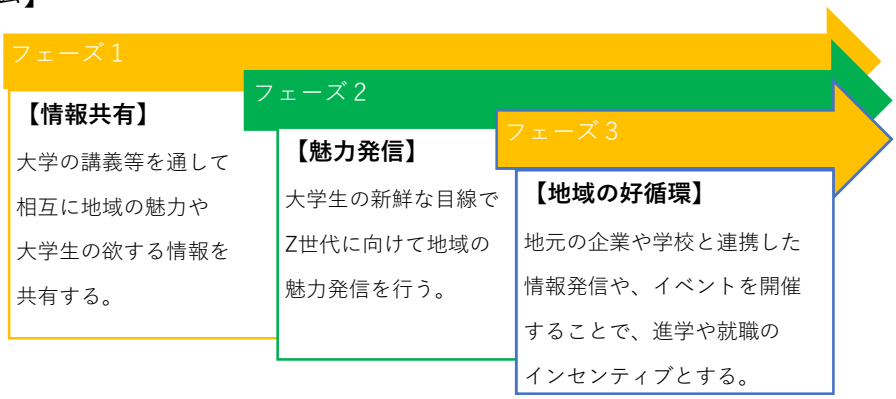
観光文化学科２年　岩切悠乃、片山ひびき、中村結衣、野本彩、福田千夏、守田美桜

5，概要

（1）背景及び目的

北九州市の課題として、進学や就職をする年代で多くの若者が北九州市から転出しており、特に 20 代は転出が転入を上回っていることが挙げられる。原因の一つとして、北九州に住む若者が地元の魅力的な情報をキャッチする機会が少ないためと考えられる。この課題を解決するため、進学や就職を控える北九州市の Z 世代と呼ばれる 10 代後半から 20 代前半の若者をターゲットとして、同世代である学生が地元北九州市の中心地である小倉の街から魅力発信を行うことで、シビックプライドの醸成を図る。また、情報発信を行うことで地元北九州市への進学や就職の動機付けとなり、定着へと促すことを目的としている。

【スキーム】



（2）コンセプト

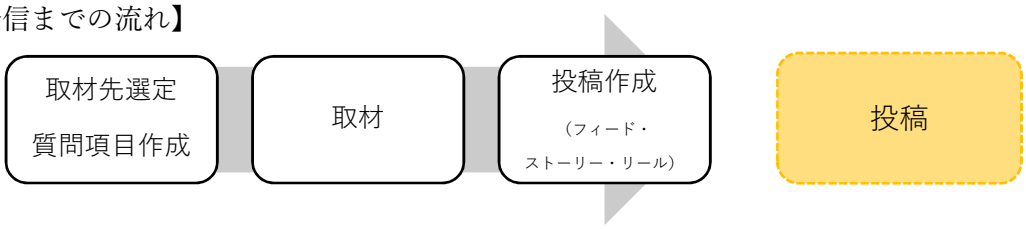
何かに期待する「期待」、そして実際に訪れ「来た」、再び訪れたいという「また来たい」という３つのプロセスで「小倉の街に期待（キタイ）して来た（キタ）、そしてまた来たい（キタイ）」と地域の人々や他の地域の人々に活動を通して感じていただけるようにと想いを込め、「コクラニキタイ」のネーミングで小倉北区の魅力発信を行う。

また、「ひとの魅力はまちの魅力」をコンセプトに、小倉の街の一番の魅力である「ひと」を切り口にして魅力発信をすることで他地域との差別化を図る。

（3）活動内容

①「コクラニキタイ」インスタグラム運営（2021 年８月１日開設）

【発信までの流れ】



ターゲットであるＺ世代と同じ視点でひとの魅力を伝えるため、学生が興味を持った「ひと」を取材し、インスタグラムの機能や特徴を捉えながら投稿を作成し発信する。

②小倉イルミネーションプロデュース・点灯式（2021 年 10 月 8 日）の実施

2021 小倉イルミネーションにて紫川河畔ポンプ室前スポットのプロデュースを行い、スノードーム型のイルミネーション「星降る✨キタイスノードーム」を考案。「コクラニキタイ」のコンセプトを形にした体感空間で、外側から見ると期待感が高まり、スノードームの中に入ると人の温かみが感じられる仕組みで本活動の周知を促すと共に小倉のまちの活性化に携わる。点灯期間中は季節（クリスマスやお正月）に合わせてスノードームの内装に変化を加えることで、リピーターを増やす工夫を行う。

6，活動を振り返って

（1）動機

大学の講義で北九州市の若者が転出しているという現状を知り、学生にできることは何かと考え、小倉北区役所総務企画課に相談、行政の思惑と学生の想いが合致したことがプロジェクトを始めたきっかけである。

（2）評価

インスタグラムの運営に加え、2021 小倉イルミネーションでのスポットプロデュースを行ったことで、多数の市民が訪れ、活動の認知に繋がった。

（3）活動を通しての学び

・インスタグラム発信を行ううえで、発信者側と閲覧者側の視点にはギャップが生じることを知り、どのような内容がＺ世代に響くのかなど市場調査を行うことでターゲット層の傾向に合わせた戦略を練ることの重要性を学んだ。

・発信のための取材では「ひとの魅力」をより探るためには、取材相手が話しやすくなるような雰囲気づくりを行うことが最も優先されることを、取材を通して実感し、そこからインタビュアーの人数の調整や取材形式の見直しと実践を繰り返し行うことで、その場を客観的に捉え行動する力の必要性を学んだ。

・魅力発信を行うにあたり、学生も気づけなかった小倉北区の魅力を活動を通して再認識ことで、学生自身のシビックプライドにも繋がり、地域活性化のために貢献する姿勢

の大切さを学んだ。

・区役所との会議では、ターゲットとする Z 世代と同世代の視点で意見を述べることが重視されるため、各学生が自身の考えや発言に責任を持つ主体性を学んだ。

・西南女学院大学と行政のチームとして目標のために活動していくからこそ、双方のコミュニケーションと協調性が求められるため、互いが信頼しあえるチームワーク構築の大切さを学んだ。

７，今後の課題

小倉北区の魅力を発信する立場として、北九州・小倉をより知る必要がある。また、現状として、本活動は未だ北九州市のＺ世代からの認知が少ないため、常にターゲット層の傾向とニーズの調査を要する。

８，謝辞

小倉北区役所総務企画課の皆様をはじめ、学生が行う取材を快く承諾してくださった企業様、本活動を取材していただき活動を周知してくださったメディアの皆様、また温かく活動を見守ってくださった地域の皆様の多大なるご協力のもと、活動が実現でき、継続させていただけておりますこと心より御礼申し上げます。

９，添付資料　（小倉北区魅力向上事業活動の様子）

写真１　小倉北区役所との会議の様子

写真２　取材の様子

写真３　イルミネーション点灯の様子

写真４　イルミネーションを学生で囲む様子

1. 企画名　地域プロジェクト：Eco-SeTRA プロジェクト
2. 主催者名　商船三井テクノトレード株式会社
3. 企画代表者　西南女学院大学　人文学部観光文化学科　高橋幸夫
4. 参加者　観光文化学科 2 年　岩切悠乃　小山ほの香　片山ひびき　神田千聡
工藤愛生　林ともみ　原田華子　福田千夏
福嶋己倖　中村結衣　野本彩　守田美桜

５．概要

(1)背景及び目的

2021 年 9 月 28 日に本学と商船三井テクノトレード株式会社との間で「教育事業に関する包括連携協定」が締結された。商船三井テクノトレード株式会社は門司港を中心としたエリアにて水素とバイオ燃料を利用したハイブリッド型先進船舶（Eco-SeTRA）の運航を計画している。本活動では、Eco-SeTRA の商用コンテンツ企画開発をおこない、学生の地方創生・地域開発・企画開発に対する教育向上と能力醸成を目的としている。

(2)活動内容

①関門エリア(門司港・下関)への視察

②Eco-SeTRA の活用案

・視察や地域のデータを参考に学生内で現状分析を行い、各自が自由に Eco-SeTRA の活用案を考え、挙げられた活用案を 4 つのコンテンツ(祝祭・イベントコンテンツ、映えコンテンツ、架け橋コンテンツ、体験型コンテンツ)に分ける。

③活用案の掘り下げ

・挙げられた活用案をビジネスモデルキャンバスに落とし込み、ターゲットの決定や提供価値などを考えていき、活用案の具現化に向けての考察を行う。

④最終プレゼンテーション

・関門の現状分析やプロジェクトのコンセプトを加えた、Eco-SeTRA 活用案プレゼンテーションを実施。

(3)各コンテンツ説明

＜イベント・祝祭コンテンツ＞

Eco-SeTRA と共に、人生の節目となる行事やイベントを通して、様々な思い出を繋いでいくコンテンツである。また、節分やひな祭りなどの伝統的な文化を印象強く学ぶ事で様々な人の心に残る形で楽しむ提案内容とした。地元の方々や、本学の学生と協力してイベントを開催する事で、関門の地域活性化への貢献が可能であり、どの季節に訪れても Eco-SeTRA の乗船を楽しむことができるように月ごとのイベント開催を考案することでリピーターの獲得も期待できる。

＜映えコンテンツ＞

SNS という現代ならではの発信方法で関門の今を届け、映えを通して関門の人々の想いを次世代へつないでいくコンテンツである。現在、SNS でのインスタ映え投稿は Z 世代が突き抜けて投稿を行っている。そのため、新しい観光資源にとって"映え"は必要不可欠であり、学生たち Z 世代がコンテンツを考えることで若者の共感を得やすいと考え、「映えコンテンツ」を提案させて頂いた。撮影スタンドやイルミネーションスポットの設置を行うことで、撮影を促す工夫を入れた。さらに、カフェのメニューを本学の栄養学科とコラボすることで、地域との関わりを広げることができる。

＜架け橋コンテンツ＞

架け橋コンテンツとは、「Eco-SeTRA」×人・「Eco-SeTRA」×地域・「Eco-SeTRA」×ビジネスといった、「Eco-SeTRA」がその媒体と繋がりを創ることを目的としたコンテンツである。船の中に博物館要素と美術館要素を兼ね揃えた小さな関門ミュージアムを作り、関門を知ってもらえるような知識や情報を提供することで「Eco-SeTRA」×地域を実現させる。また、「Eco-SeTRA」は脱炭素船であり、北九州市は環境未来都市に指定されている。そのため、「Eco-SeTRA」で MICE を開催し、「Eco-SeTRA」×ビジネスの可能性を追究する提案である。

＜体験型コンテンツ＞

船という特別な場所で、日常では体験できないようなことを提供するコンテンツである。内容に VR を用いた史跡巡りが含まれているため、教育コンテンツとしての提供も可能である。関門は現在まで日本の歴史を変える大きな舞台となってきたため、VR 体験で関門の歴史を学ぶことで、当時の文化や政治を知る機会を提供する。また、Eco-SeTRA 内のスクリーンを活用してプラネタリウムの上映も企画した。Eco-SeTRA は丸いフォルムをしており、水素を用いた燃料による静音運航が可能であるため、プラネタリウムの案ではリラックスした空間を提供できるのではないかと学生が考案した。

▼具体的な活動スケジュール

	活　動　日	内　　容
1	9 月 30 日（木）	授業ガイダンス Eco-SeTRA プロジェクト概要説明
2	10 月 7 日（木）	プロジェクト参加にあたって ・社会人マナーを学ぶ
3	10 月 21 日（木）	一般社団法人海峡都市関門 DMO による講義 ・DMO とは何か。 ・関門の現状について
4	10 月 23 日（土）	関門エリアのフィールドワーク
5	10 月 28 日（木）	フィールドワークフィードバック ・関門エリアの課題等抽出

6	11 月 4 日（木）	企画立案プレゼンテーション① 商船三井テクノトレード株式会社による講義
7	11 月 11 日（木）	ワーキンググループ編成 ・4 つのワーキンググループ（各 3 名）を編成する。
8	11 月 18 日（木）	企画立案プレゼンテーション② 各ワーキンググループの担当コンテンツ決定 ・コンテンツ種類は、祝祭・イベント、映え、架け橋、体験型の 4 種。
9	11 月 25 日（木）	プレミアホテル門司港による講義
10	12 月 2 日（木）	中間プレゼンテーション ・参加企業：商船三井テクノトレード株式会社、関門汽船株式会社、東京海上日動火災保険株式会社 東京海上日動火災保険株式会社による講義
11	12 月 9 日（木）	中間プレゼンテーションフィードバック
12	12 月 23 日（木）	企画コンセプト作成
13	1 月 6 日（木）	ファイナルプレゼンテーションに向けた最終調整
14	1 月 13 日（木）	ファイナルプレゼンテーション ・参加企業：商船三井テクノトレード株式会社、関門汽船株式会社、東京海上日動火災保険株式会社、株式会社毎日新聞社、株式会社タカギ、小倉北区役所総務企画課

6. 活動を振り返って

〇参加した動機

企業の方や学生同士で協力しプロジェクトを実施していくことは大変貴重な機会であると同時に、若者にとって船は身近なものであるとは言えないため不安も大きかったが、先進的な船の活用案という可能性あふれる課題に挑戦してみたいという学生たちの思いが参加を促した。

〇活動を通して得たこと

学生たちが普段何気なく使用しているモノやコト、目にする広告には多くの人々が関わっており、熱い想いが込められているということを学生たちは体感することができたように思われる。ただ自分達がしたいと思うことだけではなく、ターゲットを定め、費用や利益を考慮した上で具体的なものにしていかなければならず、改めて一つの企画が世に出ることの大変さを知った貴重な体験であった。そして、一から学生主体で船の活用法を検討し、提案、それが評価されたということは、間違いなく学生全員の自信に繋がったと感じている。

○今後に活かせること

商船三井テクノトレード株式会社をはじめとする企業と合同でプロジェクトを進めるうえで企業からの視点を学ぶことができたため、今後は課外活動として継続し、計画の実行可能性を幅広く検討する機会を学生に与えたい。

また、北九州市と下関市の観光現状を把握することができ、ここから、課題点を解決するとともに、地元の地域活性化学習に繋げていきたいと考えている。

7．謝辞

本プロジェクトでご指導いただいた商船三井テクノトレード（株）地域ビジネス推進室の皆様をはじめ、関門汽船（株)、東京海上日動の皆様、また講演いただきましたプレミアムホテル門司港の関係者の皆様、本学浅野学長はじめ地域連携室の皆様に対し、感謝の意を申しあげます。

8．添付資料

地域プロジェクト：Eco-SeTRA プロジェクト活動の様子(写真資料)

写真 1：関門のフィールドワーク時の様子

写真 2：船に乗船する学生の様子

写真 3 ：Eco-SeTRA プロジェクトの画像

写真 4：成果発表会の様子

写真 5：成果発表会の様子

企画名　まち歩きイベントの企画と北九州市の情報発信

主催者名　西南女学院大学人文学部観光文化学科

企画代表者　西南女学院大学人文学部観光文化学科　劉明

１概要

（１）活動の経緯と目的

西南女学院大学と北九州市は、包括連携協力に関する協定を 2017 年 9 月に締結したところである。

観光文化学科の劉ゼミ(インバウンド観光)は、九州へのインバウンド促進に力を入れている。劉ゼミと市の連携で、北九州市の魅力を発掘するだけではなく、ローカルな北九州観光コースを海外に発信することで、将来のインバウンド獲得やマイクロツーリズムの強化を目的としたイベントを実施する。

イベントでは、北九州のリアルな魅力を見つけ出すため、北九州に住む現役大学生や県外から訪れた方が、実際にまちを歩き、人と建物と出会いながら北九州の良さを見つけることを目的としている。SNS を利用し、日本に関する情報収集を行うことが好きな 20 代の社会人で、日本国内の歴史や文化に興味のある多国籍の若者をターゲットとして選定し、北九州市民となった気分を味わえるゆったりとしたまち歩きコースを提案すると共に、体験型イベントであるカヌーを組み合わせ、コアな日本の地元感を体験を通して味わってもらうプランを提案している。

（２）実施日時・場所・参加者数・活動内容

実施日	時間	場所	活動内容	参加人数
2021 年 10 月 2 日(土)	12:00～16:00	小倉北区	イベント準備・確認、まち歩き、カヌー体験	学生 11 名
2021 年 11 月 3 日(土)	12:00～16:00	小倉北区	イベント準備・確認、まち歩き、カヌー体験	学生 13 名

2 評価

（１）学生参加者の感想

この「まち歩きイベント(地域貢献活動)」を通して、自分たちのアイデアを初めて形にすることで達成感を感じることができ、北九州市の新たな魅力を発見することができた。観光文化学科である私たちにとって、学べる事が多く、将来に生かしていけるようなとても貴重な体験になった。

（２）市担当者の感想

視点を変えるだけで、小倉のまちがこんなにも自然と一体化していることに気づかされとても新鮮であった。今回のカヌー体験を機に、さらに小倉の魅力を見つけることができ、ますますこのまちが好きになった。

３今後の課題

身近にあるからこそ、よく見ていなかったり、関心を持てなかったりと見落としているものは多いのかもしれない。コロナ禍をマイナスと感じるのではなく、まちと向き合う機会として前向きに捉え、身近にある気づけていない地域の魅力や楽しみ方を知る期間として視野をひろげていきたい。

４活動経費

まち歩きイベント(地域貢献活動)に関する助成金：5 万円。また、交通費の一部を西南女学院大学会計課に請求した。

５謝辞

まち歩きイベント(地域貢献活動)にご指導いただいた国際政策課，タンガテーブル，北九州家守舎の皆様ならびに多大なご協力をいただいた西南女学院大学及び観光文化学科の教職員・学生の皆様に対し、感謝の意を申し上げます。

６添付資料

まち歩きイベント実施時の様子　(写真資料)

写真１　まち歩きイベント実施時の様子

写真２　西方様と西南女学院大学学生

写真３　イベント実施時の学生

写真４　紫川カヌー体験

写真５　紫川カヌー体験

写真６　紫川カヌー体験

1.企画名　行橋市（および観光庁）
「海と山を一度に堪能できる体験観光コンテンツ」開発事業

2.主催者名　　行橋市、行橋にぎわいづくりパートナーズ

3.企画代表者　西南女学院大学　人文学部　観光文化学科　高橋幸夫

4.参加者　　観光文化学科２年　岩切悠乃、小山ほの香、片山ひびき、神田千聡、工藤愛生、中村結衣、野本彩、林ともみ、廣方恵里菜、福嶋己倖、福田千夏、守田美桜

5.概要

（１）背景

古くから漁業集落が形成された行橋市であるが、近年は生産と担い手が減少している。またコロナ禍で漁業収益に打撃が生じている。そのため観光庁は、地域に根ざした様々な関係者が連携し、観光資源を磨き上げる為の実証事業を公募した。行橋市および行橋にぎわいづくりパートナーズを主体とし、2021 年 9 月から事業を始動した。

（２）目的

行橋市の「海と山を一度に堪能できる」体験の一環として、海の体験プログラムを中心とした観光コンテンツ化をするためのワークショップを実施する。そして、西南女学院大学の学生が、今後の事業化を見据えたビジネスモデルをゴールとした「行橋市の海の資源と山の資源を活用する 1 泊 2 日のモニターツアーの行程」を考案する。

（３）活動内容〔実施日〕

①ワークショップ〔2021 年 11 月 12 日（金)〕

長井浜公園にて対面でのワークショップを開催した。長井浜を中心に、行橋市にある観光資源の抽出、１泊 2 日のツアー行程の作成、BMC（ビジネスモデルキャンバス）の作成を行った。

②ツアーの提案　最終プレゼンテーション〔2021 年 12 月 3 日（金)〕

各班の最終的なツアー案を提案した（オンライン開催)。

③協議会への参加　〔2021 年 12 月 16 日（木)〕

行橋市における域内連携事業の実施にあたり、行橋市や地域の組織等と協議会を実施。ワークショップの開催報告及び、学生からのツアー案の発表を行った。

④モニターツアーの実施　〔2022 年 2 月 19 日（土)、20 日（日）で実施予定〕

新型コロナウイルス感染者の発生状況を考慮しながら実施予定。

福岡県及び行橋市の対応状況により、ツアーの中止や一部内容の変更、開催形式が変更

となる可能性がある。

6.成果

実施予定のモニターツアー　概要

（1）ツアータイトル・コンセプト

心と体にご褒美を、行橋でセロトニン増し増しツアー

＊コロナ禍において健康を意識している人向けに。

＊行橋で採れる、新鮮でおいしい食材で健康に。そして長井浜の美しい海に癒されて。

（2）ツアーターゲット

・日々頑張っており、リフレッシュと癒しを求めている女性（20 代～40 代）

・健康に感度が高く、心身ともに健康でありたいと考えている女性

⇒女子旅（大人の母子旅も想定）

（3）　モニターツアー行程

（集合・解散場所）　行橋駅　　（宿泊場所）　長井浜公園　キャンピングカーにて宿泊

●1 日目　　**太字：本学の学生が実施**

時間	メニュー	概要＊○○（セロトニン増加効果）
10：00	長井浜公園集合	※タクシーで現地集合
10：00 （30 分）	ツアー説明 キャンピングカーへ案内	※抗原検査、**学生が作成したツアーパンフレット等を配布**
10:30 （120 分）	① **ビーチコーミング＆ハンドメイド＆キャンドル製作** 漂着物の採集と観察、採集した漂着物を使ってフォトフレームとキャンドルを作る工作体験を実施。	＊単純作業で思考を整え、手作業で前頭葉をフル稼働 **学生が制作する**
12：30	② ランチ	
13：30 （120 分）	③ 自由時間 キャンピングカーでのひととき	
15：30	④ ヒーリングカフェタイム 海を見ながらクラブハウスでハーブティ 自由にキャンピングカーに戻っても◎	
17:00	⑤ ライトセッティング、キャンドル点灯 キャンドルと竹灯篭の飾りつけ、点灯	※キャンドルは園内配置と点灯のみ体験
18：00 （120 分）	⑥ 海を見ながらディナー おしゃれな雰囲気のディナー、季節のワイン 行橋食材を用いたメニュー	※ビュッフェ形式

20：00	⑦ バータイム カクテルなどを飲みながら星空観賞	
22：00	就寝	

●2 日目

時間	メニュー	概要
7：00	⑧ 起床・朝日鑑賞 水平線から昇る朝日を鑑賞 緑茶で目覚めの一杯	
7：10 （60 分）	⑨ 朝ヨガ 朝日を浴びて海を見ながらリラックス	＊ヨガによりセロトニン（イライラの気分改善、集中力 UP）を増加
8：10 （60 分）	⑩ 朝食 新鮮野菜や地元有名パン工房を使ったモーニングプレート、紅茶	※ビュッフェ形式
9：00 （90 分）	⑪ 漁業体験 漁協ご指導のもとマテ貝レクチャー、体験	@公園前の砂浜、または隣の砂浜
11：30	身支度、移動	
12：00 （90 分）	⑫ 調理体験・ランチ 海鮮定食	@行橋総合公園
13：30	移動	
13：30 （90 分）	**⑬ 平尾台自然の里** 平尾台見学	**学生が案内、パンフレットの作成を行う**
15：00	移動	
15：30	行橋駅解散	

７.活動を振り返って

学生の多くは行橋市に訪れたことがなかったが、インターネット調査や現地のワークショップを通して行橋市の観光資源を再発見し、それぞれの班で魅力的なツアーを考えることができたと考える。また、「行橋市には何もない」という声が行橋市民の中で多数あるという課題を見出し、女子大生がこのツアーを通して行橋市の魅力を発信することで、行橋市民の「シビックプライド」醸成の必要性も感じている。

８.今後に活かせること

参加学生は行橋市の自然に触れる機会を通して、自然の豊かさを肌で感じ、この自然の豊かさを守るには、今後の環境保全活動への参加、情報発信などで活かすことができると考え

る。

本事業をビジネスの視点で検討する BMC を用いてツアー案を考えたことにより、ビジネス視点を養うことができた。これは就職活動及びその後の活躍での自信・強みになると考える。

9.謝辞

本活動を進めるにあたり、始終暖かく見守ってくださった行橋にぎわいづくりパートナーズ様、お忙しい中親身にご指導いただきました株式会社オリエンタルコンサルタンツ様に御礼申し上げます。

10.添付資料

〇ワークショップでの様子

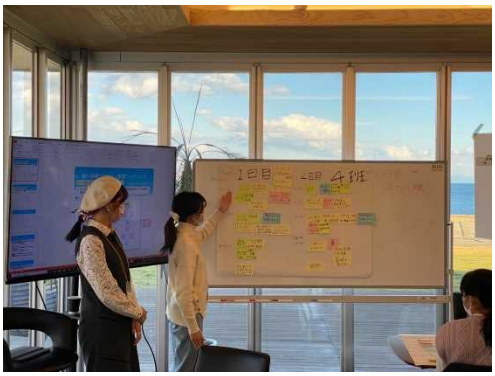


写真１：ワークショップ結果の発表

写真２：班に分かれてのワークショップ

〇協議会での様子

写真３：行橋賑わいパートナーズの発表

写真４：学生の発表

２０２１年度地域連携室の取り組み

１．後期北九州市民カレッジの開講

（1）高等教育機関提携コース

１）概要

本学では、地域の皆様の多様な学習ニーズに対応した生涯学習機会を提供し、自己実現の促進を図ることを目的に、「令和３年度後期北九州市民カレッジ」を開講している。今年度は、10 月 26 日～12 月７日の６回シリーズで実施した。

２）全体テーマ　『共に生きる』

この講座では、「共に生きる」をテーマに「心の豊かさ」「学ぶことの楽しさ」をキーワードに、人文学部英語学科、観光文化学科、短期大学部保育科のそれぞれの専門領域から講義を行った。

今回は、受講生の方々にも協力していただき感染対策を講じながら、無事に終了することができた。全体を通して、受講生の方は積極的に講義に参加し、意見や質疑応答が活発であった。最終回では、ステンドグラスが設置されてある礼拝堂を使用するなど、本学の一部施設を紹介することができた。次年度に関しても、引き続き開催する予定である。

３）各講座のテーマ

第１回：「ピンチの時こそ国際感覚を大切に！」

担当：人文学部英語学科　講師　ブラウン馬本　鈴子

内容：有事の際にどのような価値観を大切にするか人文学的に考察することをテーマに人文学と文学の定義、コロナ禍に国々の価値観が垣間見られた場面紹介や異文化ジョークのクイズなどを、朗らかな雰囲気の中、行った。

第２回：「異文化を通して日本文化を学ぶ」

担当：人文学部観光文化学科　教授　神崎　明坤

内容：日本文化を見るのに欠かせないのは日本の歴史及びグローバル化、異文化との関係である。日本文化論の名著 15 冊を概観して、多様な日本文化の見取り図を得てもらった。特に新渡

戸稲造が書かれた儒教的文化オンの日本人『武士道』、岡倉天心が書かれた老荘的文化オフの日本人『茶の本』の多様性を有する独特な日本文化の学習を行った。

第３回：「詩を読む」

担当：人文学部観光文化学科　教授　林　裕二

内容：小学校・中学校で習った詩で、お気に入りを読むということで、多くの詩が受講生から寄せられた。まどみちお「ぞうさん」などを一緒に音読した。詩の鑑賞には、音も大事だということを共有できた豊かなひとときだった。

第４回：「心を豊かに刺激する絵本の世界」

担当：短期大学部保育科　講師　池田　佐輪子

内容：「手遊び」も取り入れながら、絵本の定義の捉え方とその多様性について講義した。対象年齢ごとに実際の絵本を紹介していくことで理解を促した後は、参加者同士で読み聞かせの体験を行った。

第５回：「1 人でできる英会話学習法」

担当：人文学部英語学科　教授　大谷　浩

内容：英語学習は「独習」しかないことを、人文学研究の特徴をふまえて納得してもらい、それを前提に Youtube を含め、手軽に入手できる教材とその具体的利用方法を紹介した。

第６回：「音楽と私たち」

担当：短期大学部保育科　教授　末成　妙子

内容：音楽の楽しみ方は様々だが、私自身の楽しみ方、うたうこと、ピアノを弾くこと、調べること、編曲することを紹介し、日本の唱歌、バッハ、モーツアルト、ベートーベン、ショパンの演奏を交えて、「きく」ことで人生を豊かに過ごしていただきたいというメッセージを伝えた。

4）受講生数

17 名（単位認定者 11 名）で、スポット受講生延べ 13 名。

5）受講生からの感想

北九州市後期市民カレッジに参加して

田中　登志子

「共に生きる」を受講することで自分の中にある干からびた感動の堆積が、徐々に膨らんで大きく存在感を示してきました。

絵本といえば「桃太郎」世代の私には「あおくんときいろちゃん」はおしゃれな本、レオ・レオニの世界にハマリました。

新聞の連載小説で知った田辺聖子さんの小説は、おやつのように読みました。『銀座百点』という冊子で出会った向田邦子さん、日常の些細なことの表現の上手さに夢中になって読みました。茨木のり子さんの詩は衝撃的、吉野弘さんのやさしい眼差しに涙したこと・・・等々。これら「初めて」見た、聞いた、食した、接したエトセトラの感動は、生き抜く心の支えとなったであろうし、堆積して今日の私の背骨を構成していると感じております。

日常の何でもない一コマがキーワードです。手にした手袋から向田邦子さんの随筆「てぶくろ」、「チロリアン」は小学生の時、食して美味だったこと、美しいキャッチコピーの一行で岡部伊都子さんの文章といった具合に、感動のかけらが浮かんで、あんな感動、こんな感動と楽しませてくれます。じゃあ、今の私が「てぶくろ」、「岡部伊都子さんの本」を読んだら、「チロリアン」を食したら、どんな感動を受け取るの！？「うふふ」なのか、「苦笑するのか」、明日はどんな感動に「こんにちは」するのかワクワクします。このワクワク感が、つややかな 70 代を作ってくれそうです。

感受性に水やりを忘れてたバカ者は、受講を機に水を得た魚のようになりました。

初めての市民カレッジ講座に参加して

小野　彩華

西南女学院大学・同短期大学とご縁があり、今回はスポット受講という形で「心を豊かに刺激する絵本の世界」に参加させていただきました。きっかけは、私自身が妊娠して子どもを授かったことからです。現在、妊娠 9 か月で、産まれてくる子どもの為にも絵本の素晴らしさを再確認したいと思い、参加しました。

久しぶりの 90 分以上の講義でしたので、受講前は妊婦の私の体力や集中力が保てるか不安もありましたが、講師の池田佐輪子先生が現場で体験されたリアルなお話を聞くことができ、イメージが湧きやすく、あっという間に時間も過ぎてしまいました。特に、30 冊以上ものおすすめの絵本を紹介してもらい、具体的に子どもの発達段階に合わせて、どの時期に適した作品なのかとその理由を説明していただけたのは、子どもを授かっている私には目から鱗の情報で、とても参考になりました。

また、絵本の裏話や作者さんの人柄、こだわり、隠されたメッセージなど興味深いお話もたくさん聞くことができ、誰かに話したくなるような素敵な知識を教えていただきました。

私が、最初に絵本に興味をもつようになったのは、学生時代に幼児保育を専攻し、学んだことがきっかけでした。10 年以上前ですが、保育士として働いていたため、ある程度の情報と知識は備えているつもりでした。しかし、今回受講したことで、絵本に対する考え方や読み聞かせの意味について、あらためて視野が広がりました。

現場で働いていた頃は、どうしても絵本を純粋に楽しむだけではなく、子ども達が課題に対して興味を持つきっかけになるように、教育の導入に使う道具としても絵本に接してしまっていたので、池田先生の「絵本はしつけ(だけ)に使わないでほしい」という言葉には衝撃を受けました。

今回一度だけではありますが、市民カレッジの講座を聞くことで多くの学びや気付きがありました。結婚・妊娠を機にライフスタイルが変わったことで、同時に仕事や家族、自分自身、友人等に対する優先順位も変わりました。家族の優先順位が上がったことで、仕事や自分自身に割く時間が減り、時間的・体力的にも何かを学ぶ機会を得るのは難しいと思っていましたが、私のような女性でも気軽に参加できる講座に出会えたのは新鮮であり、学べる場所があることに嬉しくも感じました。

また、不特定多数の人が出入りしない・管理された女子大という環境での実施でしたので、治安やコロナ感染といった面でも安心感がありました。

市民カレッジの講座に参加することができて良かったです。ありがとうございました。また機会があれば、ぜひ参加したいと思います。

（2）大学連携リレー講座

1）概要

北九州市民カレッジにおいて、あらかじめ設定した「共通テーマ」に対し、大学の専門性や特性を活かした講座企画を募集し、複数の大学による連携講座を実施している。本学から 1 名が毎年講師として参加している。

2）全体テーマ

『コロナ禍下での暮らし方』

コロナ禍下で、私たちの暮らしは大きく変わりました。ウィズコロナ、アフターコロナといわれているように、終息後に以前と同じ状態に戻ることはなさそうです。今後は、人口減少や少子高齢化などが進み、社会の構造の変化も予想されます。また、行政だけでなく、企業などにおいても、SDGｓ達成のためのＤＸ推進など、様々な変化が起きています。今起きている変化やこれから予想されることを学び、変化する社会の中で、私たちがよりよく生きるためにはどうすればよいのかを考えていく講座を開設します。

3）担当講師

保健福祉学部栄養学科　准教授　山田　志麻

4）講座テーマ

『うちめしで感染症を予防しよう！　～免疫力を高める食事～　』

コロナ禍により、お家で食事を作る機会が増えたのではないでしょうか？感染症を予防するためには、バランスのとれた食事をとり、免疫機能にかかわる栄養成分を摂取することが大切です。ここでは、免疫力をアップするための食品やお家で簡単に作れるレシピについてご紹介します。

5）内容

新型コロナウイルスだけでなく感染症予防には普段の食生活が大切である。そこでまず、日常生活で気軽にできる免疫力 UP の方法や食べ方を紹介した。ちょっとした工夫が予防につながる。

次に、免疫力を高める効果が期待できる栄養素及びその効果について具体的に説明を行う。特に発酵食品は腸内細菌を整えることなどである。最後に、2022 年の「食のトレンド予測」を説明し締めくくった。以上、コロナ禍を乗り切るために、受講生の方に食生活でぜひ取り入れてほしい情報として紹介したところ、受講生の皆さんは熱心に受講していました。

2. オンライン講演会「コロナ禍と女性」

（1）主　催：女性活躍ワーキンググループ

（2）WG メンバー：大谷浩（英語学科）、太田かおり（英語学科）、高口恵美（福祉学科）、藤田稔子（保育科）、石丸美奈子（地域アドバイザー）、樋口真己（人文学部）、大谷芳子（地域連携室）

（3）企画名：オンライン講演会「コロナ禍と女性」

（4）概　要

1）活動の経緯

毎年「女性活躍」をキーワードに、また女子大学の意義を PR する取り組みを行っている。新型コロナウイルス禍において、当たり前の「日常」が保てなくなり、そのゆがみは社会的弱者である女性に一層強くのしかかることが多い。そこで今年度は、国内外の様々な分野で活躍してきた卒業生 4 名にどのようにコロナ禍に対処し、このような状況を乗り越えたか、現在どのような活動を続けているか講演いただいた。

2）活動内容

実施日時：10 月 30 日（土）14 時～13 時 30 分

実施方法：オンライン（Zoom）

①甲賀　芳子氏（mama はぐ助産院助産師／大学・看護学科卒業）

甲賀さんは 40 代で助産師のキャリアをスタートし、現在は、産前・産後のクラス・イベント・個人相談を行う出張専門の助産院「mama はぐ助産院」の助産師として活動されている。

講演会では、「女性はお産を通して変わることができること」「母親の有り様が子どもに向かうこと」や、妊婦の体と心をサポートしながら「母の力を引き出す」「母の自信を呼び起こす」「母を受け入れる、肯定する」ことを大切にしながら活動している様子を紹介された。

コロナ禍での相談内容として、感染の不安、ワクチンの不安、産前産後も人と会えない不安などを紹介された。また産後うつの発症が 10 人に 1 人から 4 人に 1 人へ増加したという情報もあるとのことだった。しかし、これまでと変わらず「本気で話を聞くこと」「自立に向けていくこと」を念頭に支援を続けていくとのことである。

妊娠・子育て中の母親を全力で支えたいという力強い思いと優しい笑顔が印象的な講演だった。

②森野　由み氏（オペラ歌手／西南女学院高等学校卒業）

当日は、オーストリアウィーンのご自宅から講演いただいた。ウィーンはコロナウイルスが蔓延し、昨年 9 カ月ロックダウン状態であったため、オペラの演奏会はすべて中止だったとのことである。オーストリアは個人の自由が尊重される国であるため、列を作って入店を待つ様子は珍しいといったことや、コロナ禍前はマスクの着用は顔を隠す行為として禁止されていたが一転し、マスク着用を義務づけることになり、国のなかでかなり議論されたといったことが紹介された。

参加者からの演奏活動ができないなかで歌唱力を保つためにどのようなことをされているのかという質問に、ウィーン郊外の田舎に住んでおり屋外で景色を見ながら、時には衣装を着て歌っているということであった。

最後に、コロナ禍の厳しい中でも、一緒にこの状況を乗り越えていこう！厳しいことも皆で力を合わせていけば、明るい方向に乗り越えていけるかもしれません！という力強い言葉で講演を締めくくった。

③尾本　麻衣氏（志免中学校英語教諭／大学・英語学科卒業）

尾本さんは、教諭になって 5 年目、現在は 3 年生の担任をしており、今の時期は子どもたちの進路実

現にむけ指導中とのことである。昨年と今年と、これまで当たり前に行っていた学校行事は縮小して開催せざるを得なかったこと。生徒たちの頑張りを披露する場である体育会や文化発表会、そして修学旅行は中止になり、悔しく残念だったという話をされた。一方良かった点は、ICT の活用が進み、生徒が意欲をもって活用していること、オンラインだと 1 対 1 での指導も可能になったそうである。

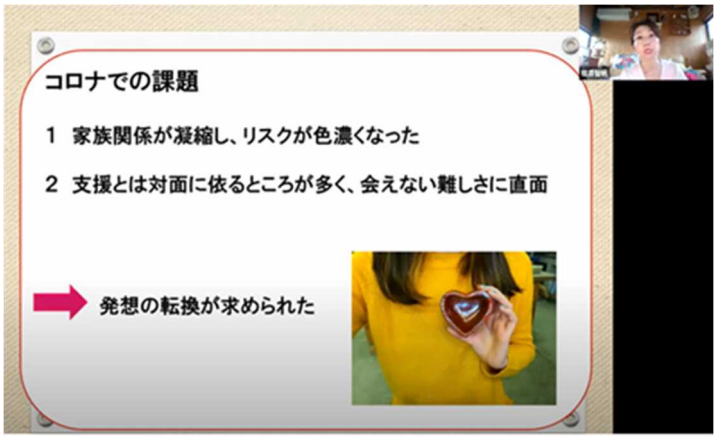
次に、コロナ禍での子どもたちの変化について、学校で実施した「心のアンケート」や学校生活に関するアンケート結果をもとに話をされた。このアンケート結果をもとに、子どもたちの様子や変化を読み取り、一人一人の心のケアや、アンガーマネジメントの説明会を開くなど子どもたちの支援を行ったことのことである。子どもたちを見守りケアする体制をつくるには、保護者やスクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーを始め、地域の人たちと連携が大切である。講演会に参加した市民の皆さんにも、地域で子どもたちを見かけることがあれば声をかけてほしいと熱心に語られていた。

④堀井　智帆氏（福岡県警察本部 少年育成指導官／大学・福祉学科卒業）

堀井さんは児童虐待の問題に興味を持ち、大学卒業後 2 年間、児童養護施設で子ども達のケアに関わった。しかし、家庭の中での支援を必要とする子どもたちのケアに携わりたいと、福岡県警少年サポートセンターの少年育成指導官に転職した。現在は、暴走、窃盗、薬物、家庭内暴力など様々な問題行動を抱えた子どもたちに関わっている。「問題行動という言葉はあまり好きではない」、問題行動とは、子どもから発せられた社会の大人や親に対する SOS であり、支援するにはその子どもの親と一緒にこれまでの育ちを紐解き、問題行動の背景を探ることが重要であるとのことである。

コロナ禍では、これまでなんとか学校に通えていたが休校をきっかけに不登校になる、アルバイトで生活を支えていたがアルバイトの減少で援助交際を始める、親の仕事が減ったことで虐待が顕在化するなどが原因で支援対象の子どもが増加したとのことである。しかしこれはこれまで見過ごされていた問題をコロナ禍という状況があぶりだしてくれたと捉え、この機会に多くの子どもを救おうと奔走している。

また少年サポートセンターでは、一人の子どもの人生に長く関わることから、支援している子どもが親になる。そのため、子育て支援にも力を入れているとのことであった。それが、非行の予防や家庭問題の連鎖を断ち切ることにも繋がっていくと熱く語られていた。



5）結　果

オンラインでの実施ということで、講師のお一人が海外から参加し、また SNS で広報するという試みから全国各地から参加した。本学を知らない参加者が講演会への参加を通して認知していただくことができ、オンライン開催のメリットを確認することができた。過去の講演会への在校生の参加が少ないことが課題であったが、専門職を目指す在校生の参加があり、先輩である卒業生の活躍を知る良い機会であった。

さらに２０２２年度は創立１００周年ということもあり、卒業生の活躍を市民に広報すること、およびコロナ禍を前向きに明るく乗り越えるために、講演会開催を通して、卒業生、教職員そして地域との互いの結びつきを再認識する機会を作ることができた。

6）添付資料

広報用チラシ

7）参加者からの感想〜アンケート結果から〜

タイムリーなテーマであり、このような状況下でありながらも、何とかよりよく対応していこうという、専門職の高い意識を感じ取ることができました。(50 代男性本学教職員)

全ての講演会において、幸せになるための「希望」が各所にちりばめられており、とても有意義でした。(60 代女性一般)

甲賀先生のお話を大変興味深く聞かせていただきました。自身の出産子育てや自身の育ちを振り返る良い機会となりました。また、コロナ禍という大変な状況の中、皆様が苦労されながらもポジティブに取り組んでいらっしゃる姿勢が印象的でした。私もエネルギーを分けていただきました。（50歳女性一般）

4人の先生それぞれの人生を語っていただき前向きな気持ちになりました。人として、親として、職業人として、先生方の言葉が私の胸にジワリとしみこみぐっと目頭があつくなる場面もありました。こんなひとときを作ってくださった西南女学院の皆様にも、先生方にも感謝です。（60代女性一般）

講師であった尾本先生、堀井先生、どちらも子どもと関わる専門職として、コロナ禍でも子どもたちと向き合い、ご活躍されていることが分かりました。私自身、子どもたちと関わるボランティア活動やサークル、そして、実習も控えているため、すごく参考になりました。傾聴の姿勢を忘れず、しっかり子どもたちのことを見て、関わりたいと思いました。（20代女性在校生）

オーストリアと直接繋がっての講演はＺｏｏｍのならではの良さだと思います。又是非企画して下さい。（70代以上女性卒業生）

３．ＳＤＧｓの取り組みを情報発信

福岡銀行からの依頼で、本学のＳＤＧｓの取り組みをポスターと動画（スライドショー）を制作した。

これらは北九州市内の大学・企業のものと一緒に、小倉駅前にあるセントシティ（旧コレット）７階のオープンスペースに２０２１年７月１９日（月）～９月末まで展示・公開された。

スライドショーには、西南女学院附属高等学校の音楽部による校歌を使用。７階では本学の校歌が流れると足を止め聞き入る市民がいたと福岡銀行の担当者からの報告があった。

４．フードドライブキャンペーン

このキャンペーンは、NPO法人フードバンク北九州ライフアゲインが、食品ロスや子どもの貧困について普及啓発を図るために行っている。家庭で賞味期限内に消費できない食品を回収して、必要な方にお渡しする活動であり、本学は食品回収ボックス設置場所のひとつとして、２０１７年度から実施している。

２０２１年度の開催は下記のとおり。
第１回　2021 年９月７日（火）～ ９月 14 日（火）
第２回　2022 年１月 18 日（火）～1 月 25 日（火）

５．広報活動

（１）パネル展示

６号館１階のロビーに、同窓生パネルや 12 月にはクリスマスツリーマップ、2021 年度地域貢献活動ポスターを展示し、学内・学外者に地域活動を紹介する機会を作った。

（２）Facebook

ブログとともにイベントなどの広報に使用するために、Facebook を開設した。今年度はオンライン講演会「コロナ禍と女性」の広報活動に利用。全国から講演に参加した。

（３）地域連携室ブログ

地域連携室ブログでは、今年度の地域連携室のイベントや取り組み、ゼミや学外活動で取り組んでいる地域貢献活動をお知らせし、学内外への広報を積極的に行った。

ブログ更新　48 件（2021 年２月～2022 年１月末現在）

（４）毎月の地域貢献活動ポスターを制作

月初めに、その月に実施予定の地域貢献活動を一覧にしたものをポスターにし、正門横に掲示板や学内電子掲示板を利用し、広く活動を紹介した。

新聞記事に見る地域連携室 2021 年度の歩み
～地域連携室の足跡～

2021 年 9 月 29 日（水）海事プレス

『ハイブリッド先進船舶の活用企画　商船三井テクノグレードと西南女学院が連携協定』

2021 年 9 月 29 日（水）海事新聞

『商船三井テクノグレード、先進船舶で講義。西南女学院大と包括連携』

2021 年 10 月 2 日（土）毎日新聞　朝刊

『西南女学院創立 100 周年プレイベントオンライン講演会「コロナ禍と女性」』

2021 年 10 月 13 日（水）読売新聞　朝刊

『「環境船」学生も活用探る』西南女学院大など企業と協定

2021 年 10 月 27 日（水）読売新聞　朝刊

『コロナに関する講演会』

2021 年 11 月 4 日（木）毎日新聞　朝刊

『「東アジア文化都市」PR　小倉城で光のショー』

2021 年 11 月 4 日（木）西日本新聞　朝刊

『小倉城黄色にライトアップ』東アジア文化都市 PR

（2021 年 2 月～2022 年 1 月末現在）

西南女学院は 2022 年に創立 100 周年を迎えます。

「感恩」と「奉仕」

この二つのこころを大切に確かな歴史を刻んでいます

その学びがあなたの要になる

「西女」は「要」

西南女学院での学びは人生を歩むうえでの芯となる「要」を育みます

一人ひとりの魂の新しい創造を重んじ

その人格　個性　能力　精神を尊び

天賦の賜物を成長発展させて

家庭に　社会に　世界の平和と福祉に貢献します

100th SINCE 1922

西南女学院大学の公式キャラクター

要かなめちゃん

Design 本学の学生たち

Production 西日本工業大学の皆さん

初代要ちゃん（左）は 2017 年生まれ。今年度は、看護学科学生の実習用ナース服姿の要ちゃん（右）が誕生しました。要ちゃんたちは本学各学科の公式インスタグラムで活躍しています。

西日本工業大学デザイン学部長 中島浩二 教授（左）と浅野嘉延 学長（右）

２０２１年度　地域活動論叢

2022 年 3 月 11 日発行

編集発行　西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部
地域連携室
〒803-0835　北九州市小倉北区井堀 1 丁目 3 番 5 号
電話　093（583）5243

印　刷　モリプリンティング株式会社
〒806-0049　北九州市八幡西区穴生 3 丁目 11 番 5 号

西南女学院は 2022 年に
創立 100 周年を迎えます

地域貢献活動キャッチコピー

「とどけ！ぬくもり 要（かなめ）から」

西南女学院大学・西南女学院大学短期大学部　地域連携室

〒803-0835　北九州市小倉北区井堀 1-3-5
chiiki@seinan-jo.ac.jp

地域連携室ブログ